# 折々のルネサンス研究——学究生活回顧

根占献一

## （一）学問事始め

私の研究生活への準備はやはり上京して大学に入ってからのことになるでしょう。それまでの勝手気ままな、親元での生活から寮の集団生活に変わりました。目黒区駒場にあったザビエル寮です。この寮には図書室があり、大学図書館と違って開架式の気さくさがあり、またキリスト教関係図書が多く、未知の領域に入った印象を抱きました。岩下壮一、吉満義彦などの日本人名は、エティエンヌ・ジルソンの名などとともに初めて知ったカトリックの神学者たちでした。また翻訳で『不可知の雲』（奥田平八郎訳、現代思潮社、一九六九年）という本があり、神秘主義なるものを知った初めだったでしょう。私たちが「西欧なるもの」と教室で出会うのは高校世界史をもって嚆矢とするでしょうが、聞いたこともない名前や術語ばかりで、受験勉強のために生活があるような、それまでの九州での生活とは違う時代の始まりでした。

私が通っていた大学、早稲田には山手線高田馬場から歩いていくと、古書店がたくさんあり、スクールバスを使うよりも帰りなどは特に立ち寄るのが楽しみとなりました。新潮社から出ていた日本文学全集全七二巻を集められたのはこの古書店街のおかげでしょう。それまでは半数近くは持っていましたが、すべて揃える気になったのです。上京して早稲田に入ったのも文学者への憧れからであり、早稲田が数多くの小説家や文芸評論家、歌人、俳人、詩人を出していることを知っており、この大学に入ることはその近道となるのではないかと考えた次第です。『ざびえる』という寮誌に小説二編[1]を書いたのもそのためだったでしょう。すでに高校時代に草稿があったものです。

ところが、寮で多くの大学生と出会い、文学に限らぬ影響を強く受け始めていました。それは哲学や神学であったり、物理学であったりしました。哲学は講義では樫山欽四郎先生の概論を取りました。創文社刊行の本『哲学概論』が教科書でした。あの時代は学生のエネルギーが凄まじく、大学入試が中止（東京大学、東京教育大学）になったり、はたまた学生ストは日常茶飯事で授業らしい授業はなかったりしたのですが、この樫山先生の授業は記憶に残る一つとなりました。多分に連続テレビ小説「おはなはん」（一九六六［昭和四一］年四月から一九六七年四月まで）の影響が大きかったでしょう。科目登録をする際に、東京にいた叔父からその番組の主役をはった樫山文枝のお父さんが授業を持っていると聞かされていたこともあり、取ったのでしょう。「存在論」などという用語を知ったのもこの授業のお陰でしょう。なおこの教室（大教室であり、一七一という番号だったか）を使った授業は少なくなく、まさに団塊世代の大規模大学での講義受講となったのでした。この教室が入った建物は、今はありません。在学中は、この建造物が村野藤吾の設計になることなどは一切気に留めることはありませんでしたが、後年、広島の世界平和記念聖堂を始め、その建築

には関心を持つようになりました。

卒業論文は十五世紀フィレンツェ・ルネサンスの世紀末、つまり新プラトン主義者フィチーノやドメニコ会修道士サヴォナローラを中心に瞑想、観想生活と活動生活などを描きました。寮生活での読書や寮生との生活のなかで自分は思っても見なかったルネサンスの一面を知った気持ちから書き上げたのでした。この卒論にはまた、高階秀爾『ルネッサンスの光と闇――芸術と精神風土』（三彩社、一九七一年）が大きく影響を及ぼしました。この高階著はしかし、早稲田の古書店街で出会ったわけではありません。神田の古書店街で偶然見つけたのです。それはまた同じく古書店で求めたパノフスキー『イコノロジー研究』（美術出版社、一九七一年）と同じ頃であり、卒論の内容と調子に大きく影響を及ぼしました。図像解釈学なるイコノロジーを知ったのも実に新鮮で、絵解きの醍醐味を味わいました。上京して上野の西洋美術館には繰り返し特別展示を含めて出かけました。ブリジストン美術館の土曜講座にも通い、マニエリスムの画家ポントルモなども知りました。

長い夏休みは九州、熊本市の両親の家に必ず帰っていました。冬、正月は帰ることがなかったのですが、学部四年生の正月は帰郷しました。そして卒論を父に読んでもらいました。そうしましたら、こんなものが論文なのかと言われました。父は理系の高校教師でしたから、情意ある文には困惑したのでしょう。そして学問をするならドイツではないか、イタリアは観光に行けばよいのではないかという考えをする人でした。大正九年生まれですから、仕方がない思考法かもしれません。三国同盟時代の人であっても、ドイツアカデミズムの情報量は芸術分野のイタリアをはるかに凌いでいたことでしょう。

しかし父の拙論指摘は当たったと思いました。自己流の、文字通りの拙論だったのです。どのような邦語文献があるのかも知らず、気に入った本を読んで書き上げていたわけですから。卒業の年に大学院として東京大学を受験しました。寮生に圧倒的に東大生が多かったことも大きかったのでしょう。彼らはよく勉強すると思いました。その差が大きいことに気づいていました。一次試験（語学と専門）に受かったあとの二次面接は口頭試問で、卒論を読んでくださったのは堀米庸三先生でした。丹念に読んでいただき、また貴重なご意見をいただき、恐縮しました。ただ最後にあなたの卒論から行くと、ここでは指導できないし、ルネサンスなら前川誠郎、高階秀爾の両先生が美術史にいると言われました。その通りだと思いました。ドイツ・ルネサンスがご専門の前川先生による、先のブリジストン講座は楽しみで、デューラーとポントルモの関係も忘れがたい講演でした。これで落ちたと思いました。あとで哲学の院に進んだ寮生に慰めてもらいました。

世間知らずの私は母校の大学院推薦を取り消され（当然です。卒論が優でなく七九点だったため）、受験することになりました。幸い、内部受験でもありますから、面接の際に古代ギリシア史、特に科学史がご専門の平田寛先生から君が一番だったよと言われました。ああ、これでまた授業料免除となることができると思いました。学部の時から授業料を免除されていたので、授業料の高い私立大学にて東京で学ぶことを始め、親不孝の数々を行ってきましたが、これだけは幾らかなりとも家の負担を軽減できたのではないかと思っています。

## （二）研究事始め

その時、大学院文学研究科の面接の際に初めて村岡哲先生と出会いました。村岡先生の所属学部は教育学部でしたので授業を取ったことはなく、ドイツ近代史が専門と聞いておりました。院では村岡ゼミと

なるとともに、村岡先生からは鈴木成高ゼミにも出るように言われました。こちらは中世史学徒のゼミでした。高名な鈴木先生の講義は学部時代から受けており、最も面白い授業の一つでした。

卒論では実は村岡先生が仙台の東北帝国大学で出会われた大類伸の論考をかなり使っていました。その論文は、フィレンツェのカマルドリ修道院で行われた活動生活と瞑想生活のいずれが大事なのかを教えてくれる内容のもので、勉強になった論文の一つでした。この卒論の発表を行ったとき、先生がこの生活を原語、ラテン語で言われたのにはさすが学者の家系だと思ったものでした。先生は必ずしも身辺を詳しくは言われませんでしたが、周囲の少なからざる人たちから先生の父親は日本思想史学の先駆者村岡典嗣だと言われました。学部生の頃は日本思想史の分野は遠い世界でしたが、早稲田大学が自己宣伝に用いる雑誌でしょうか、『新鐘』（昭和四七年）に先生が実父の典嗣について書かれているのは読んでいたのでした。

先生と大学院で出会ったおかげで、次第に広義の思想史として国内外の問題に関心が次第に湧いてきたのでした。先生宅にお邪魔しては仙台での学問の雰囲気や、典嗣による本居宣長や平田篤胤の研究を伺い、専門とされていたドイツ史のフリードリヒ大王やランケのこと、ケーベル博士や、世界的に厳しい時代に日本に来たカール・レーヴィットの話などは有益そのものでした。大類博士や村岡典嗣博士によるキリシタン史研究の話も印象に残りました。

私の出た大学では卒業論文には翻訳のない横文字文献（洋書）二点を使うようにという決まり（内規）がありました。今も生きているでしょうか。私が使った洋書、カッシーラー（Ernst Cassirer）の『ルネサンス哲学における個と宇宙』（*Individuum und Kosmos in der Philosophie der Renaissance*, 1969［1927］）はその一冊でしたが、十分に使いこなせたとはとても言えません。かなり真剣にドイツ語は勉強し、自信があったのですが、哲学専攻でなかった私には専門用語の理解が不足していました。学部四年生の時の担任はヘーゲル哲学が専門のK先生でした。大学院は哲学専攻に来てドイツ哲学を修めないかと誘われたほどですので、傾向としては哲学思想系の傾向が私にすでにあったと思いますが、読み通せる代物ではありませんでした。カッシーラーによるルネサンス思想の観点が幾らか分かった程度のものだったでしょう。あとでフランス語訳も入手して、この書の理解に努めようとしました。現在は邦訳もありますので、より多くの人たちに親しまれるようになっていることでしょう。

大学院進学を前にして、中世史の野口洋二先生宅に友だちと連れ立って遊びに行ったことがあります。蔵書の見事さに圧倒されましたが、私にとって研究上の導き手となるクリステラー（Paul Oskar Kristeller）の本があることは印象的でした。卒論を書いている段階で全く知らないイタリア・ルネサンスの哲学とヒューマニズム（人文主義）の研究者でした。私の卒論の主査と副査は鈴木先生でもなければ、野口先生でもない先生たち、つまり近代史が専門の先生がたでした。私の関心事からきっとこの研究者は知っているかと、野口先生に言われたのでしょう。大学院演習で鈴木先生はクリステラーの論文をテキストに使っておられました。鈴木先生も野口先生もよくレトリックということをヒューマニズムの関係で言われましたが、このレトリック理解に達するには結構時間がかかりました。レトリックに関心を向けさせていただいた両先生には感謝しています。

野口先生はローマ教皇グレゴリウス七世の叙任権問題に見事な研究書を出されましたが、研究史十年と言われたことも忘れられません。ルネサンスの特定問題を究明するためにやはりそれまでどのように研

究されてきたのかを知る必要があるわけです。特にルネサンスにおいて研究上問われてきたのは、ルネサンスとは何なのかということでした。ルネサンス概念論争[2]というものです。その概念論争の手引きとなる古典がありました。ウォレス・K・ファーガソン『歴史思想のなかのルネサンス。五世紀に亘る解釈史』[3]がそれです。院生の時、この本を入手しようとしました。刊行年は一九四八年ですが、絶版ではないのです。ところが内外の書店を介してもアメリア国外への輸出が禁じられているというのです。

学部時代に寮で一緒だった伊藤公孝さんはこちらが国内で「洋学」を専攻している間に、はや世界中の国際学会に出ていました。イタリアのトリエステからの便りももらったことがあります。ある時はアメリカ合衆国で研鑽を積んでいました。そこで思いきってボストンで出ている本の購入のお手伝いをしてもらえないかと頼みました。するとすぐに買ってよこしてくれました。そして私へのプレゼントだというのです。寮では彼を交えてゲーテ『ファウスト』を原書で読んでいたこともあります。奥さんの伊藤早苗さんも物理学者として活躍されましたが、昨年（二〇一九年）病気で亡くなられました。日本の物理学界は惜しみて余りある逸材を喪ったのです。

イタリア・ルネサンス研究者、特に思想・文学・芸術などのルネサンス文化研究者は米国に多く、ファーガソンの著作を始め優れた書籍が少なくなく、それにはまた米国ルネサンス学会の存在も力を貸していることでしょう。『ルネサンス・クォータリー』（*Renaissance Quarterly*）というその基幹誌には随分とお世話になりましたが、研究者はアメリカにいても、アメリカ合衆国に行くことは考えてもいませんでした。ところがどうでしょう。海外で活躍中のヒロ・ヒライさんと出会い、サン・ディエゴ、ニューヨーク、ボストン、シカゴと出かけることになるのです。つい近年のことですが、特にニューヨーク、ボストン、シカゴでは若い研究者たちとともに研究発表も行うことができました。最初のサン・ディエゴでは初めて太平洋を越えました。ボストン、シカゴのほうはイタリアに寄ってから、大西洋を越えましたので、世界一周をして帰国したことになります。

なおその間、米国ルネサンス学会は一度ドイツのベルリンで開催されました。ベルリンのフンボルト大学です。アメリカの大会はすべて大きなホテルを発表会場にしていましたが、ベルリン大会では大学そのものが会場となり、学会らしい雰囲気が一段と濃厚でした。またこの大会での特別講演などには印象深いものがありました。なぜなら、イタリア・ルネサンス研究にドイツ語圏が果たした役割には絶大なものがあり、先刻のイコノロジー、図像解釈学における貢献にしてもそうなのですが、そのような歴史的回顧も地元ドイツでの開催を反映して行われたからです。

## （三）教科書調査官時代

ところで学習院女子大学に職を得たのは三八歳の時でした。当時は学習院女子短期大学と言っていました。本日まで三二年間勤めたわけですが、そううちの十年間が短大時代でした。着任すると、所謂四大への「改組・転換」が問題となっており、諸会議に出ることになります。私はもちろんこの教育組織は学部生の頃から知っていました。馬場下の早大文学部から戸山の理工学部に用事で幾度か来たことがありました。その時、この学習院の戸山キャンパスを大きく迂回することになるわけですが、北門から入り正門に出れば、かなり近道になるのではないかと思ったことがありました。縁ができ、こうして定年を迎える場になろうとは考えてもいなかったことでした。

それまで私は文部省（現文部科学省）の教科書調査官として五年半、足掛け七年間、の勤務期間がありました。ここから学習院に移ったのは昭和最後の夏となる六三年、一九八八年のことでした。あの昭和が終わろうとするときの、あの重苦しい雰囲気は忘れられないという方も会場には多いことでしょう。なぜ文部省にいたかというと、院時代の恩師村岡哲先生の存在なしには考えられないことでした。先生は文部省で教科書検定審議会のメンバーの一人であり、日本史の主任調査官であった時野谷滋先生は旧制山形高校の教え子でした。社会科世界史の調査官を探しているために面接を受けることになったのです。

幸い選ばれたのですが、どんな仕事をするかはよく分かりませんでした。また入省する当時、世は教科書検定をめぐって侵略・進出の表記をめぐる問題で大騒ぎになっている時期でした。テレビのニュースともなり、入ってみると自分自身が夜七時や九時のニュースに写っているということも珍しくありませんでした。所謂侵略問題はメディアに大きく取り上げられ、文部省も教科書検定の意義を説くことに力を注ぎました。時野谷先生の東京大学生当時の師であり、私などもその名は知っていた日本史学の重鎮、坂本太郎東京大学名誉教授をも間近に見る機会があり、たいへんなところに勤めることになったものだと思いました。

神経をたいへんに使う仕事であったことは間違いありません。三十代の若造が名の通った教科書執筆者を前に意見を伝達するのですから、緊張する場面も多かったのです。特に私は現代史をやってきたわけでも、またルネサンス研究者と言っても駆け出しなうえに、イタリアのマキァヴェッリやフランスのジャン・ボダン、英国のホッブズなどの政治史を専門にしているわけでもありません。着任する前に村岡先生には自分はエラスムスのような人間で是々非々に物事を考えるところがありますが、大丈夫でしょうか、と聞きましたら、そういう考えの持ち主が調査官には必要だと言われました。先生によると、この職に就いた途端に文部省を笠に着て権力をちらつかせる人がいるが、それは良くないと言われました。

村岡先生はフリードリヒ大王やランケが専門でその専門から行くと保守的なイメージがあったのですが、学究に関しては非常に冷静、沈着、中立でした。従って教科書の検定審議会では元大使やメディアの論説委員に対して非常に実証を重んじる歴史学徒の立場で発言をされ、想像できなかった先生の一面と性格の一徹さを知った気持ちになりました。

私がこの職に就くにあたって心配したことはもう一つありました。仕事が仕事ですので、研究のために時間が取れなくなるのではないかということでした。しかし日本史の主任調査官であった時野谷先生は「研究なくして検定なし」と言われましたし、先生自らが学問好きの方で著書はことごとくいただきました。そして「宅調」を活用してくださいとすぐに言われました。ああ、これで勉強を続けられると思いました。最新の小著で、この仕事のお陰で同世代の専門家とも出会いがあり、たいへんな刺激を受けたことは書いたとおりです[4]。ここでは名前だけを出すと、福岡大学の森茂暁教授です。南北朝・室町期の歴史研究の第一線で長いこと活躍してきました。私と同じ歳ですので先月末は彼の最終講義を聞きに福岡まで行ってきました。

教科書調査官という職種は専門家集団であり、教科書がある限りすべての教科の調査官がいました。書道や美術、商業などあらゆる科目の調査官がいるのです。商業には早稲田の商学部、院で学んだ先輩がいて、富山県高岡の大学に移られてからは遊びに行きました。社会科に限らず、特に室が隣接した国語の調査官とも親しくなり、本居宣長

をはじめとする著作を多く著している白石良夫氏からは文献考証学を教えてもらったと思っています。中村幸彦―中野三敏の学統につながる研究者です。ある時受け付けの女性がいず、私が電話に出たところ、芸術科目の審議会メンバーであった高階秀爾先生からの直々の伝言でした。この頃よくテレビの美術番組に出演されていたので、第一声からすぐに高階先生と分かりました。

社会科の審議会メンバーでも日本史、世界史とも著名な方たちばかりでしたが、倫理社会の先生方は今日に至るまで忘れられないものがあります。きっと私が思想史を専門にしたことと次第に日本思想史を齧り始めたことによるのでしょう。東京大学の小倉志祥、大阪大学の子安宣邦両先生が来ておられました。調査官に小倉、子安それぞれの先生の指導を受けた同僚たちがいました。小倉先生には編著として『近代人の原像――ルネッサンスの倫理思想』（弘文堂、一九八〇年）があり、お弟子さんたちが書かれています。ザビエル寮で一緒だった川本隆史さんも寄稿していたので少々驚きました。また子安先生ですが、奥様である子安美知子早稲田大学教授のほうがシュタイナー教育の紹介者として一般的に名が知られているでしょう。ただ私には本居・平田系譜の国学研究者として、特に近年先生の本などから恩恵を被っています。またなかなか活発な言論をネット上で展開されているのを知り、委員会では一度も発言されたことがなかったので、この相違は何だろうかと不思議な感慨に襲われます。

私がこの学習院に縁が出来たのも調査官であったことによります。学習院大学・院の哲学出身の北村浩一郎先生が倫理教科書の分野におられて、学習院女子短期大学人文学科文化史専攻で歴史学（西洋史）の教員を求めているから、面接を受けないかと勧められたのです。文化史という専攻名にも魅力を感じましたし、村岡先生に相談するとそれは悪い話ではないと言われました。幾人か面接を受けたようですが、幸い決まりました。決まってからだったでしょうか、村岡先生からここには森岡美子先生がいるはずだと言われました。初めて聞く名前でした。

森岡先生の略歴を紹介すると、一九一三年東京生まれで、日本女子大学国文学部卒でしたが、戦前、帝国大学が女子大生に入学を認めることになったため、さらに東北帝國大学法文学部國史学科を卒業された方でした。このため同じく東北帝国大学ということで、村岡先生はご存じだったわけです。森岡先生の学問修業はこれで終わらず、戦後は東京大学文学部国史学科大学院を修了されています。そののち学習院女子部教諭、学習院女子短期大学教授を務めた方でした。『萬葉集物語』の作者として知られていますが、近世長崎の研究もされていますので広く蘭学もご専門であったと言えるでしょう。女子大学図書館には先生の専門を反映した書籍が収蔵されています。

教科書調査官としての最後の仕事の一冊は三省堂の世界史でした。執筆者のお一人は中国古代史の碩学小倉芳彦先生で、のちに学長となられたので、私の「上司」になるわけです。「教授会」なるものは教授だけが出るものだと思っていたのですが、そうではなかったので、このことを小倉先生に申し上げたら、教授を助けるから助教授と言われ、大切な職務だと言われました。三省堂というと、教科書裁判の家永三郎の日本史教科書が知られているわけです。世界史のほうも古代ローマ史や東欧近代史に反検定制度の執筆者がおられたので、結構緊張をもって臨んだものでした。

教科書検定というと、肩すかしを食らったのは山川出版社でした。高校教科書は山川でしたし、当時の東京大学教授が執筆者として表紙に幾人も名を連ねていました。新たな書下ろしの教科書でなく、改訂

の年だったためもあるのか、高校の現場で教えている先生と名刺を交換しただけで終わりました。

## （四）大学教員時代

勤務先が変わったことはルネサンス研究会がここで開催できることとなり、同研究会、われわれは何時の頃からかルネ研と呼び始め、その事務局を引き受けていただいている伊藤博明先生には幾らか助けとなったことでしょう。研究室を整理していましたら、第一回目のレジュメが出てきました。それを写真で示しましょう。参考文献には甚野尚志先生の名前も出てきます。後年、甚野先生には先生を代表とする科研の研究会等で大変お世話になることになります。

女子教育の場で教鞭を取り続けたためでしょうか、次第にルネサンスの女性に注目する演習に変わって行きました。赴任した最初の頃の演習ではメディチ家に関わる英文テキストを共通に使っていました。これは私のほぼ書下ろしの処女作『ロレンツォ・デ・メディチ』（南窓社、一九九七年）を執筆するうえで役立ちました。調査官時代から書き始めていたのですが、わけあって世に出るまでに十年かかりました。南窓社という会社名は下村寅太郎博士が名付け親です。下村先生は学習院との縁も深かったので、一度、知り合いの先生方とともに楽しい夕べのひと時を持ちました。なお南窓社の岸村正路社長は昨年暮れ（二〇一九年十二月）に亡くなられました。

メディチ家にもロレンツォ・イル・マニフィコの母ルクレツィア・トルナブオーニのように興味惹かれる女性がいて拙著でもかなり言及しましたが、そのうちに『ルネサンス・クォータリー』中の専門論文を演習に使うことが増えました。これらの論文に取り上げられる女性たちは一般講義科目には現われず、目だった存在ではありませんでした。それはここ戸山キャンパスにのみ限定されていた観があります。どういう意味かといいますと、私が非常勤として出講した共学の大学講義では主要なルネサンスの人物としては女性たちが登場していないということです。国立の大学・大学院の岡山大、新潟大、山形大[5]、東京大学、大阪大学、千葉大学などで教えましたが、女性の画家や詩人、人文主義者の名を出すことはメインでなかったのです。具体的に名前を挙げると、人文主義者のイゾッタ・ノガローラ、画家のソフォニスバ・アングイッソーラやアルテミシア・ジェンティレスキ、詩人のヴェロニカ・フランコなどですが、画家マリエッタ・ロブスティの名も挙げて良いのかもしれません。ロブスティと言わず、ティントレットと言ったが良いのかもしれません。近年、伊東マンショの肖像画が遂に出て来て話題となりましたので、ご存知の方も多いことでしょう。発見される前はひょっとしたらこのマリエッタが描いていたのではないかと、小説の題材に持ってこいの想像を働かせていたことがありました。結局はマリエッタの兄弟ドメニコ・ティントレットの作と判明しました。

逆に本務校では、他校ではよく講義したルネサンス・ヒューマニズムや哲学的論題の人間の尊厳論などは詳細に話すことはありませんでした。こちらの講義ノートは今でも大事なノートの一つであり、講義ノートをつくるためにあれほどまでに勉強したことはなかった気がします。三十代前半の頃、早稲田大学第一文学部に出講している際に作ったものでした。あの頃は通年科目でしたので、一年分あり、しかもイタリア・ルネサンス思想研究に清水純一先生に次いで佐藤三夫、近藤恒一という本格的な研究者の著作が出たばかりでノートづくりに大いに役立ちました。専門科目のさらに特殊講義なる授業科目があり、それを担当していることがあれば、この講義ノートは戸山キャンパス

でも役立ったかもしれません。

ヒューマニズムと並んでプラトニズムのルネサンス研究に打ち込んできましたが、本務校の授業では通年科目時代に「愛の思想史」という題目で、中世の宮廷風恋愛を一つのピークとしたのちに、ルネサンス時代は愛の理論家たち、特にフィチーノを取り上げて講義をしてきました。この講義は逆に他校では行ったことはありませんでした。古くは古代ギリシア・ローマに、近くは十九世紀世紀末の運命の女性ファム・ファタルまで出てくる内容のものでした。愛が人を高貴にする、人間を紳士にするという点に力説を置いたつもりですが、同僚だった先生の中には私が恋愛論を講義していると思った方もいました。愛はルネサンス・プラトニズムの重要な論題ですので、これをギリシア悲喜劇やローマのオウィディウスなどから始めてプラトンはソクラテスを介して愛、エロスをどう取り上げているか、聖書的、キリスト教的伝統のアガペとの相違は何処にあるのかなどという話だったのですが、ルネサンス思想を知らない方には恋愛論と取られてしまったようです。

本務校と他校を問わず、行ったことのある授業と言えば、「フィレンツェ史」を中心としたヨーロッパ史、就中イタリア史となるでしょうか。若い時にかなり詳しい講義ノートを作りましたし、時代にあっては、先述の野口洋二『グレゴリウス改革の研究』（創文社、一九七八年）という大著が役立ちました。やはり最も長く住み、頻繁に訪れている町であることがこの都市、フィレンツェの歴史に関心を持つことができたのでしょう。現在では優れた専門書の翻訳が出ているので、こちらに譲るべきでしょう。ただこの国の諸都市を、フィレンツェの歴史や文化のことを書いている方は明治以来日本でも少なくありません。姉崎嘲風こと宗教学者姉崎正治の旅日記などは実に面白いものがあります。この町を訪れた人たちだけの歴史物語もあるくらいに、昨日同様、今日も明日も世界各国から訪問客が絶えないことでしょう。

そしてそれぞれに思い出を作って帰国の途につくのでしょうが、イタリアに行く前に読んだ本で忘れられない一節があるので紹介しましょう。それは三輪福松『イタリア――美術・人・風土』（美術出版社、一九六七年再版）に収められた一編「鍵」でした。留学中の三輪先生は十個の鍵を常時携帯しなくてはならなかったというのです。そんなことがあるのだろうかと思いました。実際に向こうで生活して、最低二個は必要だったことは幾度か経験しましたが、さすがにこの数はありませんでした。だが、私にも私だけの物語があり、フィレンツェ人の親友ができ、そのお嬢さん二人の結婚式に出るほどの親交を深めることができました。今となってはフィレンツェに行くのは彼とその妻や家族に会いに行くためだと言っても過言ではありません。ここに彼から与えられた鍵一式があります。五個付いています。ホテルではなく、娘たちも独立したので、今度来るときは家に泊まってほしいということで訪ねましたら、早速に鍵を渡されました。三泊ほどして帰る時に返却しようとしましたら、いつでも帰ってきてほしいから、それは君の鍵だと言われたのです。

彼の家からはチェルトーザ修道院も近く何度も訪れています。デューラーから影響を受けたポントルモ作品を見ると、私の青春時代が思い出されますし、カマルドリ修道会の僧房にも車で案内してもらいました。夏さえひんやりした山中にありました。このような出会いがなければ、私の「洋学」は机上の産物で終わったことでしょう。

ところで、皆さんたちの中には、「洋学」専攻なのに若い時に留学のことは考えなかったのか、と思われる方がいらっしゃるかもしれません。近年、若い世代の研究者からこのような質問を受けたこともあ

ります。考えましたし、実際に挑戦したこともあります。一度は鹿児島の岩崎産業グループの海外研修制度です。特定の国だけで募集していたわけではなかったのですが、父がこの情報を東京にいる私に知らせてきました。おそらく九州では広く新聞等に大きく募集が出たのでしょうが、親から言われるまで知りませんでした。書類を出したのち、面接を受け、その際にイタリアに行きたい理由を面接官の前で説明したことでしょう。三人の面接官のうちおひとりは女性でした。どこで受けたのか覚えがないのですが、うまく行きませんでした。

もう一つはイタリア政府の国費留学です。こちらは書類作成から面接場所までよく覚えていますが、これまたうまく行きませんでした。試験も簡単な口頭試問だけであり、年度毎の人数に決まりがあり、面接終了後、来年も受けますか、と訊かれたのには驚きました。これっきりで受けることはなかったのですが、あとでイタリア文化会館（イタリア外務省所轄）から「マルコ・ポーロ賞」という賞をもらった時、この時の面接官で知り合いの大学教授も出席中でした。歓談の時に、あの時は根占さんを落として悪いことをしたと言われ、さらに驚きました。

あの時こうだったら、現在が違っていただろうと考えても仕方のないことですが、最後まで勤務できた本校にはサバティカル制度があり、三年勤務後には行けるとなっていました。同僚の先生方も、時の学長だった小倉先生も、まだ海のものとも山のものともつかぬ私に理解を示され、快くフィレンツェに出ることができました。郊外にあるヴィッラ・イ・タッティのハーヴァード大学ルネサンス研究所のことも考えましたが、面識ができていた裾分一弘学習院大学教授からは市内にあるドイツの美術研究所を勧められました。ここで良かったと思っています。推薦文は裾分先生に書いていただきました。またヴィッラ・イ・タッティには後年招待を受けて初めて訪ねることになります。滞在中あるいはその後の旅行中に国費留学生の何人かとすれ違ったり、挨拶をしたりしたものでした。皆、女性の方たちでした。中には奨学金の期限が過ぎて、長年こちらに滞在している方もいました。

## （五）ルネサンスの世界的拡大

短大時代は文化史学科で、大学時代は国際コミュニケーション学科で教えました。学問のスタイルからいけば、最初の文化史ということが合っていたことでしょう。学科名に付く「コミュニケーション」とは何なんのか、またもう一つの学科である英語コミュニケーション学科との相違がどのようにあるのかは不明なままに退職を迎えた気がします。文化史時代にはまだ歴史学、哲学、美学、文化人類学等の専門家から成り立つ学科であったのに対し、国際コミュニケーション学科では政治学や法学、経済学などの諸教員と同一学科を組んだために人文学的な専門性が薄れました。また半期制となって通年制の科目でなくなったために講義が単発的、性急的になり、時間をかけた構成性が弱まったように思います。

そのような変化のなか、所属学部学科の国際文化交流学部、国際コミュニケーション学科のかしらに付く国際や、中心に位置する文化交流という用語には教員として一段と意識が高まりました。また日本における「洋学」研究はどうあるべきなのか、という問題意識はもともとからあり、読む本も次第に変わっていきました。世をあげてグローバリゼーション化が言われていたことも大きかったかもしれません。私の専門はルネサンス文化・思想史です。そのルネサンスは十四世紀半ばころから一六〇〇年頃の時代幅で考えています。開始期を半世紀前にとって一三〇〇年頃、あとを半世紀下げて十七世紀半ばまでとす

ることも可能でしょう。日本で言えば、鎌倉時代末期から南北朝時代、室町時代を経て江戸時代早期くらいまでとなります。「日本において」ルネサンスを研究するのですから、このような意識を忘れるわけにはいかないでしょう。同時代の東西がどうあったかは研究の基底になくてはならないでしょう。

このような時代枠は狭いルネサンスを飛び越えるものです。狭義のルネサンスとは「学芸の復興」ということでしょう。当時の同時代日本がギリシア・ローマの古典復興に幾らかなりとも力を尽くして貢献していたわけではありません。だが、この学芸復興の影響を全く受けなかったわけではなく、その意味でルネサンス文化は日本にも及んでいたと言えるのです。つまり南蛮人が来日して文化交流が始まったからです。そして先の時代幅のルネサンス期にキリスト教が宣教されたことは、ちょうど一千年前に仏教が伝来した出来事と比定できる大事件でしょう。キリスト教とルネサンス文化が日本に及ぼした影響については、これまでも小論や小著で取り上げてきました。

これらの観点から興味深い書籍に、原田裕司『キリシタン司祭後藤ミゲルのラテン語の詩とその印刷者税所ミゲルをめぐって』（近代文芸社、一九九八年）があります。学芸復興時代のルネサンスの本場にあってはラテン語を駆使することは当然のことでしたが、極東の日本にもこのラテン語で詩を綴れる人物が現われました。古典語としてのラテン語が西欧だけに留まらない言語であったことを示しています。古代ローマの典雅なラテン語、またその文学の再興に努めた、文字通りルネサンス的人間のロレンツォ・ヴァッラ（一四〇七-一四五七）のような人文主義者から見ると、それはローマの不朽の発展のように思われたことでしょう。

歴代の古典学者に詳しかったジョン・エドウィン・サンズは、イタリア・ルネサンス時代、古典復興に寄与した数々の人文主義者たちを紹介するなか（この中にはもちろんヴァッラもいます）、新大陸の北米にその言語と文化が伝わる経緯に言及しています。ここも日本同様に元々は古典語に縁がなかった地域でしたが、ラテン語が広がり、同時代の東西に古典語とその文化が伝わる出来事となったと言えるでしょう。ただアメリカ大陸の場合は、サンズが記しているように古典ギリシア語も伝わったのでした[6]。これに対し、日本はラテン語に限定されていたうえに、所謂鎖国のためにその花が咲き続けることはできませんでした[7]。限界はあるものの、文化のグローバリゼーションのただ中に日本があったことを示す好例として、司祭後藤ミゲルの名を出したことは的外れではないでしょう。

原田著では印刷に触れられている点も重要でしょう。ルネサンス時代は金属活字印刷時代に入り、活版印刷機は日本にももたらされているのです。東洋は製紙法と印刷術に関しては長い歴史があるのですが、十六世紀の末に天正遣欧使節が西洋の印刷機械をもたらし、やがてキリシタン版という活版印刷本が生まれることはよく知られていることでしょう。

日本に南蛮人と称される人々がやってきた時、この地球上は多くの地域で新たな時代への転換期を迎えていました。南蛮人の故郷であるヨーロッパでは宗教改革が起こり、当時の日本が知ることができなかったルター派やカルヴァン派の宗徒が生まれていました。日本では昔からこれらのキリスト教徒を新教徒と呼んできました。南蛮人はこれに対し、旧教徒となるわけです。その旧教徒のいるイタリアもまた新たな宗教上の波が訪れていました。ここでは人文主義者で宗教改革者の詩人マルカントニオ・フラミニオ（一四九八［一四九七］-一五五〇）の名を出しておきましょう[8]。ラテン文学が隆盛するルネサン

ス期にあってカトリック教徒の活躍が未知の大陸だったアメリカ地域へ伸長するなか、フラミニオはラテン詩がこの地域に広がることを楽しみにしていました。ルターの影響を受けたフラミニオが旧大陸の極東日本でもやがてラテン詩が生まれる時代の到来を知ることができたならば、古典古代からの文化に親しみ、心和んでいたフラミニオは信仰上の苦悩をしばし忘れ去ることができたでありましょう。

イタリア半島の人文主義者の名をこうして挙げましたが、当時の日本との関係からイベリア半島にいささか注目してみましょう。南蛮人の主体はポルトガルであり、スペインでしょう。イタリア系宣教師も少なくありませんでしたが、先の両国からの宣教師は数の上でも無視はできないでしょうし、特にポルトガルとの関係が深いでしょう。しかし国勢から見てスペインの国力は強大であり、また一五八〇年からはスペイン国王がポルトガル国王を兼任します。日本に来た修道会のうちイエズス会の活動が最初期から目立っていますが、そのイエズス会士は所謂対抗宗教改革の時代の教皇下の「先兵」、と位置付けられることが少なくありません。

ここで少し術語を検討してみましょう。所謂宗教改革が起こったため、教皇側はトレント公会議を開催し、キリスト教世界の巻き返しを図ったとされ、そのなかにまた特にイエズス会が位置付けられるのでしょう。日本ではReformation（Riforma）を宗教改革と訳しています。あまりプロテスタントをつけては言わないようです。つまり「プロテスタント改革」とは言わず、もう宗教改革とは反カトリック側だけの問題であって、カトリックとしてはこれに反対ないし対抗するだけで自律的な改革は行われなかったと思われているようです。古典的研究に立ち帰ると、ヴィルヘルム・マウレンブレヒャーはルターの登場以前のカトリック教国の土壌に見られる「宗教改革」的動向と人物に注目しています。シスネロス枢機卿はその一人であり、マウレンブレヒャーは「カトリック的」「宗教改革」の歴史を叙述しています[9]。

したがってただ単にイベリア半島の両国が他律的に促された動勢から海外に進出し、われわれと出会ったと見るだけでは不十分でしょう。ヨーロッパ全体の情勢と自国の宗教文化環境がいかにあったかの歴史的理解も東西交流史に関しては不可欠でしょう。私は先の人文主義の領域とともにこの宗教上のカトリック、非カトリックの活動した時代を「ルネサンス」と広義に呼んできました。時代幅、時代枠については先述しましたが、終わりの頃については一言申し上げておきます。

話の筋道から南蛮人の話になり、鎖国という概念も出しましたが、来日したのは南蛮人だけでなく、オランダ人や英国人もやってきたことを見逃すわけにはいきません。紅毛人と呼ばれ、しかも俗人に限られていて目を引きます。ここではイングランド、英国に注目すると、女王エリザベス一世時代の英国は割と日本ではなじみがあり、シェイクスピアの演劇は親しまれてきたことでしょう。ただその後、この国には動乱の時代が待ち構えていました。日本では鎖国の決定的要因となる島原の乱（一六三七～三八）が起こるころになります。政治的対立は激化の一途を辿って、革命が勃発し、国王が処刑される事態に至ります。これには宗教上の反目があり、英国国教会とカルヴァン派長老派教会の衝突も珍しくなく、これらに臆することのないピューリタンたちの活動も盛んでした。このような状況の中、大陸のローマ教会とイエズス会側のカトリック巻き返し政策も陰に陽に行われ、これに島国の残されたカトリック教徒たちは熱心に協力しました。彼ら少数派にとって自分たちの苦境は仲間の日本におけるキリシタン、カトリック教徒の命運と重なり、迫害を自分たちの問題としてみなすことができたのでした[10]。当時の状況は歴史的にも思想的にも実に興味深

いところがあり、英国討究は目下私の新たな関心事となっています。

## 結びにかえて

研究というのは一過性のものではあってはならないでしょう。世代が移っても重要な主題は追究されていきます。定年とともに研究が終わるわけではないでしょう。一個人としての命の続く限り続くものでしょう。当たり前のことを話すと、トートロジーになりますね。私の本分は思想史、精神史と称されるもので、思考することが大事です。具体的には自身の研究の原点、狭義のルネサンス、豊饒な一四〇〇年代（il Quattrocento）、十五世紀に立ち帰って再出発することも意義深いように思われます。最も多く文献を集めているのもこの時代ですし、貴重書も少なくありません。おそらくはなかなか理解できない事柄を分かろうとして努力することになるのでしょう。年月を重ねた分、知識は増えましたが、気になって仕方がないことは絶えません[11]。この点では最初にお話した若い頃と変わっていない気がします。他方で、現役時代は時間が足りず、余り読むことができなかった日本語で書かれた本、翻訳であれ、日本の古典であれ、これらの書物も特に読んでみたく思います。もう既に頭の中に浮かんできます。目を通していない本が意外と多いのです。蒐集量は結構にのぼりますから、息つく暇がないくらいに読み続けないと、それこそ時間が無くなるかもしれません。

さていよいよ時間が残り少なくなってきました。在職時代は研究に打ち込めて幸いでした。そしてそれは教育に反映されたと信じています。大学では「研究なくして教育なし」です。来月四月からは星槎大学で非常勤講師となります。もはや研究室はありません。今後は環境がガラリと変わることになり、このため日常生活のほうがどうなっていくのか、不明です。最後の最後まで私事にわたる話しが続きましたが、これで最終講義を終了したく思います。長時間のご清聴、まことにありがとうございました。それでは、ごきげんよう。

記。本稿は令和二年（二〇二〇年）三月七日土曜日午後に予定されていた本務校での最終講義に基づく。また当日は、本学を基点に多年にわたって行われてきた「ルネサンス研究会」（事務局専修大学、伊藤博明同大学教授研究室）が最終の運びでもあった。コロナウイルス禍のため、ともに中止の止むなきに至った。

1 「十年後」、ザビエル学生寮『ざびえる』六、昭和四四年十二月七日発行。「廓物語」、同七、昭和四五年十二月六日発行。

2 学部時代の演習でS君がこのルネサンス概念とその概念問題の歴史をまとめた発表を行った。そのレジュメは今でもある。彼は卒業後高校教師となった。

3 Wallace K. Ferguson, *The Renaissance in Historical Thought. Five Centuries of Interpretation*, Mifflin, Boston 1948.

4 『ルネサンス文化人の世界――人文主義・宗教改革・カトリック改革』知泉書館、二〇一九年、二五五頁以下（回顧）。

5 山形大学の後輩に呼ばれて集中講義に行った際、堀米庸三先生の実家、現紅花資料館（河北町）を訪ねた。

6 John Edwin Sandys, *Harvard Lectures on the Revival of Learning*, Cambidge at the University Press 1905.

7 Cfr. 猪俣賢司「キケロ主義とトレント公会議体制下のローマ修辞学――マルク＝アントワーヌ・ミュレから日本巡察使ヴァリニャーノへ」『ロンサール研究』(Revue des Amis de Ronsard), XV（2002）, 27-51頁。

8 ここでは私蔵書のなかからフラミニオ関連書の幾冊かの文献紹介を行っておこう。伝記に、Carol Maddison, *Marcantonio Flaminio. Poet, Humanist and Reformer*, London 1965. 人的関係を如実に示すMarcantonio Flaminio, *Lettere*, a cura di Alessandro Pastore, Roma 1978.「宗教改革者」としての側

面は、Id., *Apologia del Beneficio di Christo e Altri Scritti Inediti*, a cura di Dario Marcatto, Firenze 1996. なお拙著『ルネサンス文化人の世界——人文主義・宗教改革・カトリック改革』でフラミニオに言及することができた。

9 Wilhelm Maurenbrecher, *Geschichte der Katholischen Reformation*, Nördlingen 1880. Pier Giorgio Camaiani, Interpretazioni della Riforma cattolica e della Controriforma, Estratto da *Grande Antologia Filosofica*, Volume sesto, Milano, pp.329-490.

10 Vittorio Gabrieli, *Sir Kenelm Digby, un Inglese italianato nell'età della Controriforma*, Roma 1957, p.209.

11 思いつくままに文献を挙げると、Heiko Augustinus Obermanの数ある著作のうちから二点、*The Harvest of Medieval Theology. Gabriel Biel and Late Medieval Nominalism*, Durham, North Carolina 1983（1963）. そして論文集成の*The Dawn of the Reformation*, Edinburgh, 1992. トマス・アクィナスに代表される十三世紀スコラ学の盛期をもって中世思想が解体衰退に向かう十四世紀となるのでなく、この十四世紀におけるノミナリズム（唯名論）の展開こそが次世紀と密接に連関していくと見る宗教思想史家がオーバーマンである。アルプス北側の世界が彼の主なフィールドとはいえ、イタリア・ルネサンス思想にも折に触れて言及していて見逃せない。

（本学名誉教授）